

序

丁度大正 11 年春、桜の花の散った頃であった。東京ステーションホテルの 20 号室で色々の事を黙想して居った。その時ふと次のような事を考え始めた。

大正 9 年以来、日本の財界はまるで石垣の壊れる様に大動揺を來たし、我国の大事業家、大実業家が續々倒産しつつあるのは如何なる原因であろうか、また此の人々は何の罪科があつて斯くの如く不幸な破綻の逆境に遭遇したのであるか、某君にしろ、某々君にしろ何れも日本の立派な代表的実業家として、従来随分国家的貢献を為し來たつたものであつて、仮令その間に多少不真面目な仕事をした事があつたとしてもそれは大体から云えば玉に瑕くらいのもので、その功は罪よりも遙に多大であるからして、斯くの如き憂き目を見るべき理はないのである。

どうしても之には何か深い原因があるものに違いないと、段々瞑想を續けて行つた。そうすると何時の間にか夢の中に入ってしまった。それからしばらくして夢から醒めて気の付いた時に、私の頭にはこんな考えが浮かんで來た。或いは之を天來の福音とでも名くべきものであるのか、つまりそれは次のような考えである。

日本の経済界の実情は、輸入超過のため年々歳々通貨が減少するから利息が高くなり、その結果、有価証券その他の財産の評価が減少し、資本の減少となり、信用が氷結してしまつたから、今まで手広く商売をやつて居つた者から真つ先に倒産し、それから次第に小さい商人までも倒れてしまう運命に成つてゐる。

故にこれを救済し、日本の財界の建替えをやろうと思ふならば、どうしても早く在外正貨の売り止めを為し、同時に通貨の増發をしないと云うと、日本の国民それ自身は恰もお伽話の蛇が冬期に穴の中で自分の尻尾を食つてゐるようなものである。

即ち始めは尻尾の所からして、遂には臍の辺までも段々と食い減らして行き、終には首の付け根までも食い詰め、借金で首の廻らぬ位の騒ぎではなく、餓えて青黒い生氣のない顔をした首ばかりが残つてゐるような事になり、日本国中はまるで炭團屋<sup>たどん</sup>の庭先ではないが、首ばかりがごろごろ転がり廻つてゐるような状態になるであらう。

そこで私はこの夢から思いついた考えを基礎として、暇のある毎に色々と考えたり、また時々新聞などにも断片的に卑見を述べてみたこともあり、先輩と意見をも戦いはした事があった。

私の考えは正しいか否かは分からないが、唯だ私の考えに間違いの無いと云うだけの信念と、今やこれらの考えを幾分まとめて来たという自負心だけは出来た。

丁度住田君がやって来て、私の考えた事を一通りまとめて話をした時に、同君がこれを清書して持って来てくれたので、この際「経済野話」と題して公刊する事にした。道は遠くて夜は暗い。然しこの書が暗夜の一燈とでもなれば、それは私の一生の光榮とする所である。

大正 13 年 5 月

東京ステーションホテル 20 号室にて

著者

## 目 次

(1) 経済史眼の必要	(1)
(2) 国字の経済的改良	(19)
(3) 米の経済的地位	(41)
(4) 物価論	(76)
(5) 金利論	(104)
(6) 通貨論	(122)
(7) 金輸出禁止論	(157)
(8) 我国経済界の現況に就いて	(176)
(9) 貿易論	(191)